



No. 23

平成25年3月18日

発行

多治見市教育研究所

URL:<http://www2.city.tajimi.gifu.jp/~kyoiku/x/>

本紙は多治見市教育研究所のホームページ上でもご覧いただけます。

巻頭言

「教育」への 幻想

多治見市立池田小学校長
日比野 則幸

「教育」と聞くと、即「学校」を思い浮かべるように、我が国では学校と教育の結びつきが強い。これは、明治5年の学制公布以来、百四十年にわたり諸先輩の方々が営々として積み上げられてこられた学校教育における伝統や実績等が国民に広く浸透し、信頼を獲得している賜物だと理解している。このこと自体は好ましいものであると思う。

しかしながら教育の場は「学校教育」だけでなく、「社会（地域）教育」や「家庭教育」があることを忘れてはいけない。もちろん頭の中では理解していても、現実には教育のかなりの部分が学校に期待され過ぎているのではないかと思える。特に最近では社会の急激な変化や進展に伴い、過剰に依存されていると思える傾向が強いように思える。

例えば、何か新しい問題が起こる度に、「教育」という接尾語をつけて「学校で〇〇教育を」と社会が要求してくる。もう既に市民権を得ているが「環境教育」「交通安全教育」「消費者教育」「情報教育」「ICT教育」「福祉教育」「防災教育」「食育」「生命の教育」・・・等々、枚挙にいとまがない。世間は何かあれば「学校で指導してください」「学校が指導していないことが悪いのだ」という風潮である。「〇〇教育」そのものを否定はしていない。それぞれに意義があることも認識し、各学校では誠実に取り組んできている。

というのも、学校現場は、基本的には善良で従順なお人好しの職員集団であり「子どものために」とあれば、一心不乱に取り組んでしまう傾向が強いのである。しかし考えてみるがいい。時間、空間、教材、予算など物理的に制限のある中に、新たなものを取り入れることなどできるのだろうか？少なくとも既存の何かを廃棄・軽減しないことには無理があるはずだ。無理がないというのなら、従前

からあるものが「やってもやらなくてもよいものだったのでは？」という疑念を免れない。

本来、教育は創造的な営みであり、そのためには余裕と自由がなければならない。世間一般が牧歌的であった時代ならいざ知らず、現在は余裕と自由が保障されているとは言えまい。余裕のある現場は「怠けている」、自由に満ちた現場は「たるんでいる」と言われかねない。学校教育に対する見方があまりにも短絡的で、要求内容が性急すぎるために、現場は多忙になるばかりで充実感や達成感が伴わないのではないだろうか。

新しい教育を導入するなら、その目標の設定や計画作成、周知徹底に慎重さや時間・予算等が必要であることは言うまでもない。どこまで達成すれば終結という期限設定も必要である。そして、それらの成果は児童生徒の成長発達に関するものが大半であり、その評価は学年末や卒業後まで観察を継続するケースが多い。要は時間がかかるのである。私自身の経験から言っても、子どもの頃に受けた教育の記憶が、退職目前のこの年齢になって生き方を左右していると思えることもある。

一面的な実態に着目し、「〇〇教育」という錦の御旗を振ることを否定するつもりはない。変化に遅れないことや早急に成果を上げる努力も必要ではある。しかし、こうした時代だからこそ目先の現象に右往左往せず、長期的な視野を持ち、過去を冷静に検証し、遠い将来を見通しながら教育の在り方を考えることも、重要ではないかと思う。

目先の変化に追われ、早急に成果を求められて多忙になるばかりで充実感が乏しく疲労感だけが増してくる・・・。

「これからの学校教育は大変だなァ」と、私のような者が心配をしているのも「教育」への幻想の一つかと思う。

<理科>自ら諸感覚を働かせて 積極的に自然の事物・現象に触れる児童の育成 ～第6学年「月と太陽」における学習過程の工夫～ 多治見市立南姫小学校 教諭 新宅 武徳

1. 主題設定の理由



「おお！」5月21日の金環日食を全校で観測した際、歓声が上がった。金環日食観測の際の歓声から分かるように、機会があれば天体に親しみ、その自然の現象に感動できる子がほとんどである。『諸感覚を働かせて自然に働きかける。』まさに、本単元は、それが実現可能な単元である。はじめのうちは受動的かもしれないが、5月21日のような感動体験を経験し、さらに自ら諸感覚を働かせて自然の事物・現象に積極的に触れようとする児童を育みたいと考えた。そして、天体に関する知識が、実体験に基づく、実感を伴った理解として身に付くことを願い、本主題を設定した。

2. 研究仮説

①学習内容の系統性を把握した後、『感覚・知覚型体験』を「体得」の時間として、また、単元における単位時間に6つに分類・整理した言語活動を位置付ける。また、②その活動によって得られた事物・現象を説明するためのモデル実験を行い、③その結果を、単元の学習に必要な『表現』を用いて交流する言語活動を大切にすれば、自然の事物・事象をより実感を伴って理解し、さらに自然への興味関心を高め、積極的に諸感覚を働かせて自然に触れようとする児童となるであろう。

3. 研究実践

(1) 単元指導計画の工夫

①学習内容の系統の把握

単元で身に付けさせるべき科学的な知識や概念を明確にして単元指導計画を作成した(図1)。この単元指導計画を利用して、本単元が、既習事項(第3, 4学年)とどのようなかかわりがあるか分析した。

図1 単元指導計画を用いた系統性の分析

②『感覚・知覚型体験【体得】』の位置付け

単元の2時間目に、実際の月を観察することを通して観察方法を身に付ける時間を設定した。また、月齢2.4～2.6ごろの月を観察できる日に設定する。2回目の観察は、新月をはさんだ約7日後。月齢3.6ごろを設定すれば、こ



の月も昼間に観察できる。「月の形が日によって変化する(三日月)こと」「月は、太陽のある側が光っていたことから、太陽の光を反射して光っていること」などを、実感してとらえることができた。

③単位時間ごとの言語活動の明確化

単元に必要とする『表現』を用いた学習活動により、言語に関する能力が高められ、思考力・判断力・表現力等の育成が効果的に図られる。そこで、単元における各場面の言語活動を次のように六つに分類・整理し、計画に位置付け、それを意識した授業を展開した。

- A 体験から感じとったことを表現する【感受・表現】
- B 事実を正確に理解し、伝達する【理解・伝達】
- C 概念・法則・意図などを解釈し、説明したり活用したりする【解釈・説明】
- D 情報を分析・評価し、論述する【評価・論述】
- E 課題について、構想を立て実践し、評価・改善する【構想・改善】
- F 互いの考えを伝え合い、自らの考えや集団の考えを発展させる【討論・協同】

(2) モデル実験の位置付け【習得】

①より児童の印象に残る指導過程の工夫

第5時は、「地球から見た月の形が変わるのはなぜか。」という課題を追究するために、次のような指導過程、教材教具の工夫を取り入れた。

- 1 これまでの観測を想起する導入(プロジェクターを用いたダイナミックな事象提示)
- 2 班単位で行う、より正確な結果を得やすいモデル実験の工夫
- 3 各班の結果を交流し、課題にせまる場面(【F 討論・協同】の言語活動)
- 4 本時の学習を振り返る終末実験

②本時の学習を振り返る終末実験

児童を体育館中央に集め、理科係に月にみただたサッカーボールをもたせ、モデル実験で考えたことを全員で確認した。スポットライトのスイッチをオンにすると「おお。」という歓声が起こった。児童は、全員が月と太陽の位置関係と月の形を確認することができた。



4. 成果(○)と課題(●)

- 天体の学習では、外に出て、実際に天体を観測するなど『感覚・知覚型』の体験を意図的に仕組むことが、実感を伴った理解につながるようになった。
- 体験(本単元では月の観察)によって獲得した事実をもとにして課題化し、それをモデル実験で検証していくという流れは、児童の思考に沿ったものであった。
- 単位時間内の言語活動や他教科の言語活動との関連も明確にすることで、児童はより質の高い表現技能を獲得し、思考力・判断力・表現力等の育成が効果的に図られると考えられる。

「説明的な文章の内容や構造を理解する力」を育てる国語科学習 ～1年生「くちばし」「じどう車くらべ」を通して～

多治見市立精華小学校 教諭 足立 奈穂

1. 主題設定の理由

(1) 国語科の今日的課題

岐阜県の学習状況調査の結果の分析と指導方法の改善から、今年度担任させてもらっている1年生という発達段階をふまえ、事柄の順序を理解させることと、大切な言葉に気付かせることが大切であると考えた。

(2) 願う児童の姿

- ①内容を読み取り、意欲的に追究する姿。
- ②大切な言葉を自分のまとめに書くことで、充実感を味わっている姿。
- ③学んだことを他教科や日常生活でも生かそうとする姿。

(3) 授業の工夫改善点

昨年度の自分の授業実践の課題から、次のように3つに整理した。

- ①説明的な文章を構造的に読むことの実体化
- ②他教科との関連の明確化と単元構造図への位置付け
- ③教材に応じた自己評価の吟味

2. 研究仮説

単元を通して付けたい言語能力を明らかにし、その力を児童が習得し、活用できるような単元指導計画を工夫する。そして、教材の特性を生かした言語活動の充実や学習を実感できる評価を工夫すれば、児童は説明的な文章を読む力を身に付けることができる。

3. 研究内容と実践の具体

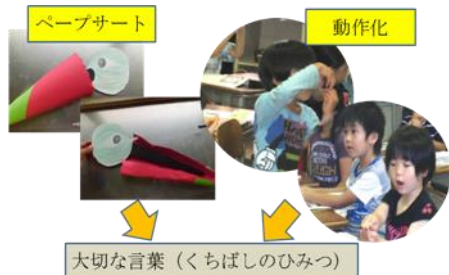
(1) 習得と活用を場を明確にした単元指導計画の工夫

「くちばし」で習得させたい内容は、「説明の順序」つまり、「問い」と「答え」があるという説明文の基本文型だととらえた。そこで、単元を貫く課題を「くちばしクイズをつくろう」と設定し、単元前半の習得を図る授業では、問いは赤鉛筆、答えは青鉛筆で囲むという指導を繰り返したり、学習プリントや板書を工夫したりした。

「じどう車くらべ」は、「くちばし」とは文章構成が異なり、「問い(2つ) - 答え - 答え - 答え」という構成であるが、「くちばし」と同じように、問いを赤、答えを青という色分けを行い、どの文章が、どの問いと対応しているか分かるようにした。また、「くちばし」では、問いの文末が「～でしょう。」であったのに対し、2つ目の「みいつけた」では「～でしょうか。」と、「か」が付くことで、たずねている文ということを学習した。

「じどう車くらべ」では「～ていますか。」という文末になっていることに気付かせ、問いの文がどこにあるか考えながら、学習を進めた。また、算数や生活科などの他教科や日常生活での具体的な活用場面を単元指導計画にも位置付け、意図的に指導を行った。

(2) 教材の特性を生かした言語活動の充実



単元時間のまとめでは、挿絵やペーパーサート、動作化を通して気付いたくちばしのひみつを表す言葉を使って、出てきた鳥に向けて手紙を書くという言語活動を仕組んだ。平仮名の学習が十分でない時期の言語活動なので、書き出しの部分からあらかじめ書くことや、感想を書くときの手助けとして、児童の初発の感想によく出てきた言葉の中から「すご

い・びっくり・はじめてしまった」という言葉をプリントに載せておき、児童が自分の気持ちに近いものを選んで書くことが出来るようにした。

(3) 学習を実感できる評価の工夫

「くちばし」では、小学校の学習を始めて間もない児童にとって自己評価をすることは難しいと考えた。そこで今後付けていきたい力が分かるよう、教師が評価の観点を二つに絞って、文章が書けている児童を全体に紹介し、今後どのように書くかの手がかりとなるようにした。

「じどう車くらべ」では、これまでと同様、教師の価値付けに加え、自己評価も行った。読み取りの観点として、「てをあげることができた」「じぶんのかんがえをはびょうできた」の2つで意欲面の評価を行い、3つめの「わかったことがかけた」で、読み取りのまとめについての自己評価を行った。「わかったことがかけた」ということについては、毎回単位時間の終末に本時学習した言葉を確認し、「しごととつくり」について書くことができたかを教師と共に一斉に振り返りをした。

4. 考察

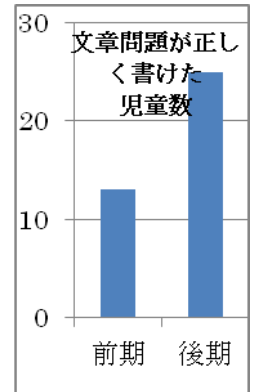
(1) 習得と活用を場を明確にした単元指導計画の工夫について

他教科との関連では、文末表現にも注意して「問い」の文を探したことによって、算数で、文章問題の題意を理解したり、問題作りをしたりすることができるようになった。

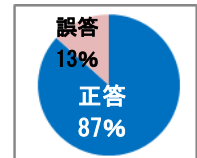
前期、算数のたしざん・ひきざんで文章問題を作る学習では、文末まできちんと書けた児童は13人であった。書けなかった児童の中には、「花が2本あります3本買ってきました。」のように作ることができていても、最後に「みんなでなん本でしょう。」の一文がないため、問題として完成しないというものが多くあった。しかし、後期には、25人に増えていた。その中でも、11人は2つ以上の文章問題を作ることができており、確実に力を付けていることが分かった。

このように、国語が他教科へつながりをもっていることを実感した。

(2) 教材の特性を生かした言語活動の充実 評価テストを作り、結果から考察した。



設問① 説明的な文章と文学的な文章を 読み分ける力を把握する問題



約9割の児童が、文学的文章と説明的文章の区別を付けられるようになってきたことが分かった。説明的な文章では、問いと答えを考えながら読むことによって、文学的文章の学習の仕方とは違うということが定着してきたと捉えた。

このような設問を全部で4つ作り、問いと答え、大切な言葉を見つける力が付いてきたかを調査した結果、多くの児童に確実に力が付いていることが分かった。

5. 成果○と課題●

- 習得と活用を場を明らかにし、意図的に指導したことで、他教科や日常生活に生きる国語科学習を進めることができた。
- 説明の順序や、大切な言葉の習得を図るための効果的な指導方法を明らかにすることができた。
- 教材の特性だけでなく、児童の発達段階も踏まえて言語活動を工夫する。
- 児童が自分自身を的確に評価できるような自己評価の項目を工夫する。

自信を持ち、いきいきと遊びや活動に参加できる子 ～毎日のいきいき遊びを通したクラス活動への充実に向けて～

多治見市立養正小学校附属幼稚園 教諭 南雲 千佳

(1) 子どもの姿から

「話が聞けない」「自信が持てない」などの課題から、いきいき遊びを継続していく中で「認められる喜び」「できるようになった自信」から子どもの姿が変容していくのではないかと。

(2) いきいき遊び研究会の参加から

いきいき遊びを行ったあとの集中力が格段に上がることを実証したことから、どんな教材が有効なのか、支援児に対する有効な教材は何か、いきいき遊びを通して、支援児を含めたクラスの姿が変容していくのではないかと。

II. 研究仮説

いきいき遊びを通し、さまざまな事に興味・関心を持ち、「自己肯定感」「満足感」を味わうことで、日常生活の中でも自信を付け、活動に対して意欲的に参加することができるのではないかと。

III. 研究内容

1. いきいき遊びの教材の工夫

- (1) 年齢・発達に見合った教材
- (2) 家庭への啓発
- (3) 日常の保育活動へのつながり

2. 支援児に対してのいきいき遊びの在り方

- (1) 社会面の弱さのある子（Y子）に対して
- (2) 自閉症児（A子）に対して

3. いきいき遊びを日常の遊びに生かす工夫

- (1) 教材の在り方
- (2) 環境構成の工夫



IV. 実践

1. 家庭を巻き込んだ自己肯定感の確立

～N子の実践を通して～（H24年度）

保護者にいきいき遊びを啓発していくことで、家庭で子どもを褒めるきっかけになり、子どもの自己肯定感を育む。

2. 活動につなげた いきいき遊びの在り方

～買い物体験～（H24年度）

いきいき遊びを使った導入を取り入れ、子どもたちのスムーズな活動へのつながりに取り組む。

3. いきいき遊びを通し、クラスの中での存在価値を高める

～Y子の事例を通して～（H23年度）

社会面に弱さのあるY子に対して、いきいき

遊びを通してクラスの中で認める経験を多く持てるよう取り組む。

4. 支援児に有効な教材の検証

～A子の事例を通して～（H24年度）

自閉症児であるA子が、どのような教材に興味があるのか。また、いきいき遊びを通してクラスの中でのA子の様子がどう変化していくのか検証する。



5. いきいき遊びを日常の遊びにつなげて

～R子の事例を通して～（H24年度）

友だちと関わりたいという思いはあるが、素直に表現できないR子が、いきいき遊びを通してどう変わっていくのか検証する。

V. 成果と課題

○日々の保育の中で、子どもからいきいき遊びに関心を持つ言葉が聞かれるようになったり、活動の中で1人を褒めると相乗効果が起こったりと、「褒められる」経験を多く積んだことで、いきいきとした姿が見られるようになった。

○いきいき遊びが、子どもの興味・関心を広げたり、姿勢保持につながったりするだけでなく、心の成長にも大きな役割を持つことが分かった。

○「分かること」を迫るのではなく、「楽しむこと」を重点に持って研究していったことで、A子のような支援児に対してもいきいき遊びの時間が有効であることが分かった。

●今後も、さまざまな個性のある子に対しての教材研究や、いきいき遊びを生かした心の成長の在り方を引き続き検証していきたい。

VI. 終わりに

実践を行っていく中で保育者自身の子どもに対して「捉え方」「褒め方」「援助の仕方」も変わってきたと実感した。いきいき遊びは子どもだけでなく、保育者にとっても自分の保育の在り方を見直す良い機会になると思う。

今後も様々な学年で保育を実践していく中で、教材の在り方を検証していきたい。

運動を通し楽しみながら体力をつけていく子

～苦手な雲梯遊びを通して～

多治見市立笠原小学校附属幼稚園

教諭

永井 美帆

I. 研究テーマ設定の理由

多治見市の“子どもの健康・体力づくりたじみプラン”に基づき、幼稚園でも一日の保育活動の中でげんきタイムを位置付けて取り組み始めた。

子どもたちに体力をつけるために、まず体力に関わる実態を把握した。その結果、体支持持続時間では、全国平均を上回っているものの持続時間の長い子と短い子の二極化が進んでおり、個人差が大きいことが分かった。そこで、握力や体支持の力をつけるために、遊びの中で固定遊具の活用が有効であると考え、テーマを設定した。

II. 研究仮説

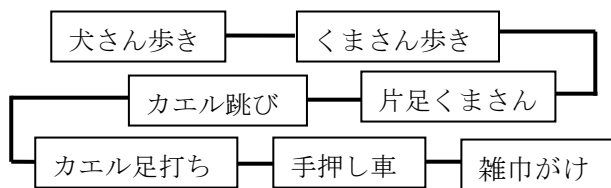
雲梯に必要な力をつける遊びの工夫や雲梯の苦手意識を取り除く活動を工夫し、一人一人に応じた支援をするとともに子どもたちの成長を保護者と共有することで運動を通し楽しみながら体力向上していくことができる。

III. 研究内容と実践

1. サーキット遊びを活用した取り組み

(1) 雲梯につながるサーキット遊びの工夫

園児たちに雲梯に必要な体支持の力をつけるために次のようなサーキット遊びを工夫した。



(2) 主体的な遊びにつながる環境の工夫

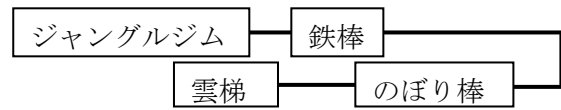
子どもたちが自ら進んで遊べる、主体的な遊びに繋がる環境を工夫した。



2. 固定遊具を活用して取り組み

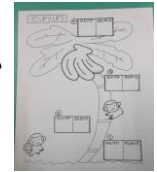
(1) 雲梯につながる固定遊具の選定

以下のように園児たちの苦手意識が少ない固定遊具から取り組み、雲梯に必要な力をつけていく。



(2) 自主的に遊ぶカードの活用

のぼり棒に対する苦手意識が高いことからカードを作成した。



(3) タイプ別の指導・援助

園児たちが、前向きに雲梯に取り組んでいけるようにタイプ別の指導・援助を行った。

タイプA：自分から進んで取り組める

タイプB：保育者の声かけや見守りで取り組める

タイプC：抵抗がある、失敗を恐れる

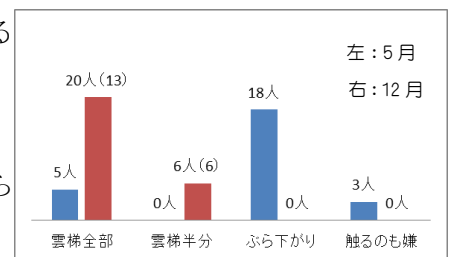
タイプD：常時保育者の声かけや見守りが必要

3. 家庭への啓発

家庭と連携を図り運動遊びを啓発するために、通信を工夫し参観日を活用した。

IV. 研究の成果と課題

実践を進める中で雲梯にかかわる成長が右のようにみられた。



【成果】

* () は保育者の支えがあればできる数。

- ・保育者の多少の援助があれば、全ての子どもが半分以上できるようになった事が大きな成果である。
- ・苦手意識の少ないものから多く取り入れた事で前向きに固定遊具に取り組んでいく事ができ、子どもの意識が変わった。
- ・通信や参観日を活用して、子どもの実態に目を向けてもらうことが出来た。

【課題】

- ・自主的に遊ぶカードを苦手意識の高かった雲梯にも活用していきたい。
- ・サーキット遊びや固定遊具に休日にも親子で取り組めるように啓発していきたい。

発達障がいについて考える

教育相談室 課長代理 鷲見 龍

発達障がいとは・・・

最近、「発達障がい」という言葉をよく耳にしますが、周りにいる人は正しい認識をしているのか疑問に思うことがあります。

先生が扱いにくい児童生徒がいると、すぐに「あの子は、発達障がいだ」とつい言うってしまう傾向にあります。私たちは、正しい認識のもと子どもたちと接していかなければならないと考えます。一般的に「発達障がい」とは「発達過程が初期の段階で何らかの原因によって阻害され、認知、言語、社会性、運動などの機能の獲得が障害された状態」のことを言います。その種類としては、

・LD（学習障害）

聞いたり話したりすること、読み書きすること、物事を筋道立てて考えること等のうち、特定のことが苦手

・ADHD（注意欠陥・多動性障害）

気が散りやすく、落ち着きがない、衝動的な行動をとることがある、自分の行動をコントロールすることが苦手

・軽度知的障害

周りを認識したり、考えたりすることが苦手、同年齢と比べて、言葉や運動発達に遅れ

・高機能自閉症

相手の気持ちを察したり、周囲の状況に合わせて行動したりすることが苦手、こだわり、対人関係やコミュニケーションが苦手

このようなものが挙げられます。

私たちは、発達障がいのある子どもについて捉えがちなこととして、次のようなことがあります。

- ・取り組みの偏りから、「できるのに、しない」と考えてしまう
- ・表面上の行動から、周囲が困る行動をする子どもである
- ・何度も厳しい注意をすることによって、

改善されると考えてしまう。

しかし、周りがそれについて理解を示せば、困った状態も解消できるはずです。

まずは、その行動を理解し、解決するための支援を講じる必要があります。

支援の考え方

- ・本人に対して、困り感を理解し、適切な行動を引き出す、育てる。
- ・周囲に対して、教師の対応をモデルとして、どのように接していくかを教える。
- ・保護者に対して、一緒に考えていく姿勢を示す。すぐにできないことは長期的な対応をする。

今、大きく取り上げられていることはユニバーサルな支援です。ユニバーサルとは、発達障がいのある児童生徒だけでなく、どの児童生徒に対してもできる支援、また、誰に対しても分かる授業をすることとして提唱されています。

支援計画

①行動問題が起きる前に回避する対応

- ・どんな場面で行動問題が生じやすいのかを観察し、生じやすい状況を把握する。
- ・周りと同じような行動ができるような場面設定をする。

②行動問題が起きたときの対応

- ・否定的な言葉をかけるのではなく、その子を認める指導・支援を行う。
- ・やって良かった！を実感させる。
- ・興奮には制止はしない、収まってきたら切替えを促す。

③どんな行動をしたらいいのかを教える前向きな対応

- ・どのようなコミュニケーション行動をとったらいいのかを教え、要求を充足する。など、教師はもちろんのこと、周りの大人、子どもが共通理解のもと支援していかなければなりません。

この機会に是非「発達障がい」について、もう一度考えてもらえるとありがたいです。